

信濃教育

巻頭言

自立と依存

「自立と依存は対立概念ではない」

これは河合隼雄が著書『こころの処方箋』の中で言っていることである。この言葉は、長野上水内教育会総集会の講演会で、小平奈緒さんのコーチである信州大学教授結城匡啓さんも触れられていた。

依存をなくしていけば自立する、それは単純な考え方である、むしろ必要な依存を受け入れることである、と河合は言うのである。さらに、依存を排して自立を急ぐ人は、自立ではなく孤立になってしまう、と現代人に警鐘を鳴らす。

私自身を振り返ってみると、子どもたちに「人に頼らず自分の力でやりなさい」「自分ひとりで考えなさい」と何度言ってきたことか。自立することは、人に頼らないことだと思い、困難を自力で乗り越えることが、強さだと思っていた。子どもたちにそう要求し、自分自身にも依存しないことを求めてきた。しかし、そのことがかえって教育効果を上げられないことが多々あったように思う。周りの先生や関係者に頼った方が、子どものためになることに気づかない時期があったように思う。

自分ですべて抱え込んでしまい、苦しい思いをしている先生が多いと聞く。私は教師には、上手に周囲に依存する力が重要だと思う。困ったら、苦しかったら、人を頼ればいい。そういう自分を自覚し、それに感謝することが目指す姿であると、河合隼雄も言っている。そうして教師は自立していき、その姿から子どもたちも自立することを学んでいくのではないだろうか。吉田拓郎も「わたしは今日まで生きてみました 時にはだれかの力を借りて 時にはだれかにしがみついて…」と歌っている。